

親鸞さまの

【本文】

無明煩惱しげくして

塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは

高峰岳山にことならず

【意訳】

人々の煩惱は、ますます盛んになって

まるで塵の数のように、無数にあふれております。

自分の都合の悪いことには喜んで受け入れて、都合の悪いことには腹を立てて遠ざけていく心の移り変わり様は、

まるで起伏の激しい高山の姿のようです。

【私の味わい】

愛憎が、一枚の紙の表裏のように移り変わる人の様、これを描いた短編「夜の道」

（藤沢周平著）があります。お杉さんという妙齡の女性のもとに、見ず知らずのある中年のご婦人が訪ねてきます。そして、あなたは、三つの時に行方知れずになったわが子ではないか、と言うのです。そのご婦人いわく「当時、私は嫁ぎ先で主人と諍いさかいを起こし飛び出しました。暮れゆく中で、幼いあの子は泣いて私を追いかけました。しかし、心が夜叉になっていた私は、あの人との子供なんかどうなってもいいと振り返りもしなかったのです。しかし、ふと正氣に戻って引き返した時、もうあの子の姿はありませんでした」と。当惑したお杉さんでしたが、後日自分も同じように飛び出した際、はっと当時の記憶をぼんやりと思ひ出します。居ても立つてもおられず、「母」に会いに行くため、「夜の道」を駆け出した――、というお話です。

可愛さ余つて憎さ百倍、という我が心に翻弄された一人の母親の姿が描かれています。その心の根本に、自分のその時の都合で、愛と憎を使い分けるのが自分の心であるよと親鸞様は仰っています。家族、友人、他人にも同様でありましょう。

しかし、ひとたび仏様の光に照らされるならば、そのような私に気が付かせていただき、そのことを恥ずかしく思いつつ、少しでも慎もうとする生を得られます。もし、このお光に出遇あっていないければ、自分のありのままの姿を知らずにこの一生を終えていたかもしれません。お光に出遇あえたことを喜びつつ、南無阿弥陀仏。（悠水）